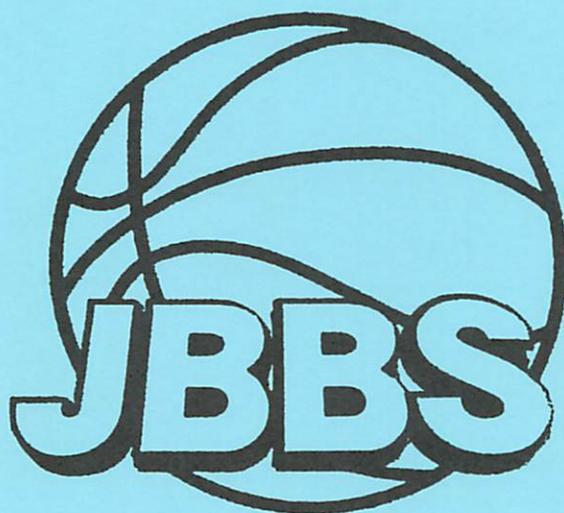


抜粋版

バスケットボールプラザ

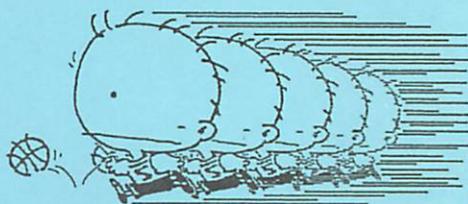
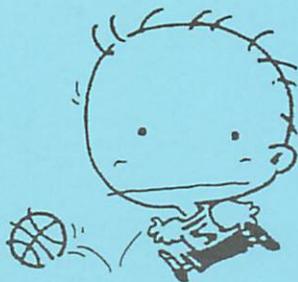
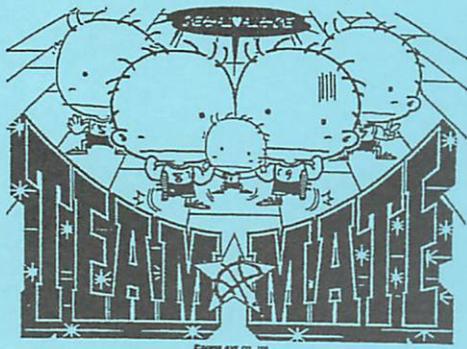
Basketball Plaza

No:40



2009年1月

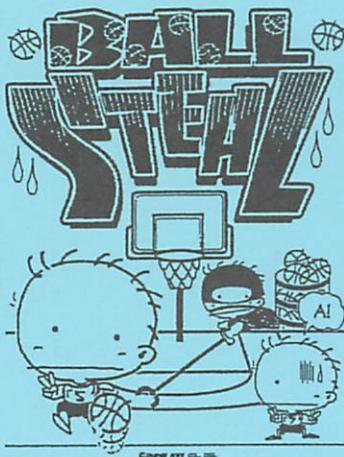
NPO法人 日本バスケットボール振興会



DUPER.



表現の自由人。



DUPER.®

デューパーファイブ株式会社
〒130-0023 東京都墨田区立川3-3-5
TEL . (03)3632-7045 (代表)
FAX . (03)3632-8327

URL : <http://www.duper.co.jp>

E-mail: info@duper.co.jp

目 次

○ 女子U-18チームアジアを制す	3
F I B AアジアU-18女子バスケットボール選手権大会優勝	
○ 恒例の秋季講演会と交流会開催	6
○ スペシャルオリンピックス	13
第1回バスケットボール交流会を支援	
○ 一枚の写真から . . . 昭和7年のできごと	15
○ 李想白氏	17
優れたバスケットボールの指導者を思う	
○ 会員だより	
バスケットボール・あれこれ 紺野 仁 . . .	19
タカガ高専、サレド高専 岸本 三男 . . .	21
私とバスケットボール 柴田 健司 . . .	23
楽しく観戦出来るバスケットボール 池田 敦子 . . .	25
○ 第60回全日本大学選手権記念大会	27
○ 第39回全国高等学校選抜優勝大会の成績	32
○ オールジャパンの結果	38
第84回天皇杯・第75回皇后杯全日本総合バスケットボール選手権大会	
○ 計報	44
○ プラザ こぼればなし	47
○ 事務局だより	48

女子U-18チームアジアを制す

—FIBAアジアU-18女子

バスケットボール選手権大会優勝—

[編集部]

平成20年11月2日から9日まで、インドネシアのメダン市で開催された上記大会において、U-18女子日本代表チームが決勝で中国を破って優勝した。このところあまりいい話題が無かった日本バスケット界にもたらした、明るい話題である。

以下大会出場チームと日本代表チーム、戦績についてご紹介する。

[出場チーム]

レベルI

中国 日本 韓国 チャイニーズ・タイpei マレーシア インド

レベルII

インドネシア タイ フィリピン シンガポール ホンコン・チャイナ カザフスタン

[日本代表チーム]

主なスタッフ

	氏名	所属
チームリプレゼンティブ	諸山 文彦	日本協会理事
スーパーバイザー	講武 達雄	神奈川県立旭高校
ヘッドコーチ	一色 建志	聖カタリナ女子高校
アシスタントコーチ	林 慎一郎	福井県立足羽高校
アシスタントコーチ	渡邊 勝也	札幌山の手高校

選手

No	氏名	P	身長 (cm)	年齢	所属
4	伊藤 恭子	PG	161	18	デンソーアイリス
5	岡本 彩也花	PG	160	17	桜花学園高校 2年
6	阿部 雪音	SG	170	17	聖カタリナ女子高校 3年
7	大沼 美咲	SF	176	18	山形市立商業高校 3年
8	間宮 佑圭	C	183	18	東京成徳大学高校 3年
9	淀野 潮里	SG	170	18	土浦日本大学高校 3年
10	元山 夏菜	SF	181	18	昭和学院高校 3年
11	濱口 京子	PF	181	18	聖カタリナ女子高校 3年
12	山本 千夏	SF	175	17	東京成徳大学高校 2年
13	水島 沙紀	SG	168	17	桜花学園高校 2年
14	篠原 恵	C	184	17	東京成徳大学高校 2年
15	渡嘉敷 来夢	PF	191	17	桜花学園高校 2年
	平均		175		

P-ポジション：PG-ポイントガード、SG-シューティングガード、

SF-スモールフォワード、PF-パワーフォワード、C-センター

年齢、所属は平成20年11月10日現在

[試合結果]

予選ラウンド

11月2日(日)

日本 96—67 チャイニーズ・タイペイ

11月3日(月)

日本 90—50 マレーシア

11月4日(火)

日本 78—65 韓国

11月5日(水)

日本 111—34 インド

11月6日(木)

日本 87—71 中国

以上レベルIにおける予選リーグの結果、全勝で1位となり予選リーグ上位4チームによる決勝トーナメントへ進出した。

準決勝

11月7日(金)

日本 90—53 チャイニーズ・タイペイ

日本は決勝進出と2009年に開催されるU-19世界選手権出場獲得を掛け、予選リーグ4位のチャイニーズ・タイペイと対戦。相手を寄せ付けず圧倒的な勝利を収めた。

第1ピリオド、試合開始直後、#6阿部の速攻が決まった日本は、さらに阿部の3Pシュート、#15渡嘉敷のゴール下シュートなどで先行する。チャイニーズ・タイペイは攻め手を欠き得点が伸びない。日本は22-12で第1ピリオド終了。

第2ピリオド、日本は#14篠原の連続得点などでこのピリオドも主導権を握る。渡嘉敷の速攻、#10元山のドライブインなど波状攻撃を仕掛け、守っては相手の得点を8点に抑えて、日本48-20の28点差で前半を終了。

第3ピリオド、後半建て直しを図るチャイニーズ・タイペイは積極的な攻撃を見せる。日本は#5岡本らのスピードある攻撃で追従を許さず、日本67-37の30点差をつけて最終ピリオドへ。

第4ピリオド、日本は#11濱口のドライブシュートで始まり、#8間宮のインサイドプレイで加点し、更にリードを広げる。チャイニーズ・タイペイはなす術無く後退。結果的に日本が90-53で快勝し、決勝進出とU-19世界選手権の出場権をこの時点で獲得した。

決勝

11月9日(日)

日本 90—87 中国

日本は初優勝をかけて、今大会6連覇中の中国と対戦。序盤は一進一退の展開。前半は中国に13点のビハインドを負ったが、後半開始早々に一気に追いついて一時は逆転、終盤の競り

合いをも制して勝利し、今大会の初優勝を飾った。

第1ピリオド、開始から一進一退の展開が続き両者譲らず、しかし終盤中国が足を絡めた速い攻撃を見せ、21-24と中国3点リードで終わる。

第2ピリオド、このピリオドに入っても形勢は変わらず、重い展開が続く。中国はボールへの激しい執着心を見せてそこからシュートチャンスを生み出し、リードを広げる。日本は中国に主導権を握られて38-51と13点のビハインドで前半を終了。

第3ピリオド、追う展開となった日本は出だしから渡嘉敷が奮起、#5岡本のドライブインも含め、開始3分半で1点差まで詰め寄りその後逆転した。中国も冷静にシュートを決めて対抗しようとするが、流れをつかんだ日本が#10元山の3Pシュートで形勢を逆転し、日本が69-61の8点リードで最終ピリオドへ。

第4ピリオド、第3ピリオドの流れとはうって変わり、日本は中国に4連続得点されてリードを失う。その後は点の取り合いで時間が過ぎていく。残り32秒で同点から日本は#15渡嘉敷がドライブインして2点リードする。その後の中国の攻撃をしのいだ日本は#10元山がダメ押し freeslowを決めて3点差で逃げ切った。

この結果日本は、アジアにおいてこの大会で6連続優勝の中国を破り、全勝して初優勝という素晴らしい結果を残すと共に、2009年7月にタイで開催される「第8回FIBA U-19女子バスケットボール世界選手権大会」の出場権を獲得、アジア地区1位での出場となった。

4年後のオリンピック出場を考えると、現在のU-18の選手たちが中心となることはほぼ間違いないだろう。アクシデントに会わないようしっかりと強化して、次の大会に臨んで欲しいものである。バスケットボール界で久しぶりの明るい話題を提供することができ、頑張った選手やスタッフに感謝したい。

【レベルI最終順位】

優勝	日本
第2位	中国
第3位	韓国
第4位	チャイニーズタイペイ
第5位	マレーシア
第6位	インド

恒例の秋季講演会と交流会開催

[編集部]

平成20年11月10日、恒例となっている秋の講演会ならびに交流会を、東京五反田の「ゆうぼうと」にて開催した。

講演会の講師として、新しく日本協会専務理事に就任された木内貴史氏をお迎えし、これからのバスケットボールについてお話しいただいた。

講演会に続いて開催された交流会には、愛知会長をはじめ日本協会会長代行の佐室有志氏にもご参加いただき、bjリーグからは中野社長と河内コミッショナーもご参加されるなど、久しぶりに明るい話題が飛び交うひと時となった。

木内貴史氏講演内容概要



木内貴史氏

昭和15年(1940)静岡県出身、68歳。静岡高校から慶応大学へ進み、大学在学中に日本代表選手としてローマオリンピックに出場、卒業後住友金属へ入社、再び日本代表選手で活躍、東京オリンピックにも出場した。静岡県協会理事長、副会長を歴任。現在静岡市にて産業建設株式会社代表取締役。

はじめに

この8月に日本協会専務理事に就任しました木内貴史です。過日、振興会の小澤理事長から「これからのバスケット界」の話をして欲しいと依頼されOKしましたが、本日は諸先輩や私が現役時代にお世話になった方々が多数おられまして、お話をするのもにも大汗をかくことになりそうかと存じます。

ご承知のとおり日本協会は約3年余の間、大きな空白と混迷の期間がありました。私も一時はその渦中に居ましたので、否応なしに皆さんと相談をしたり意見を交わしたりしておりました。昭和5年(1930)に日本協会が発足してから今日までの間で、こんなに長い間、空白と混迷を続けたのは初めてのことだったのではないかと思います。

8月に会長として麻生衆議院議員(現在総理)をお迎えすることが決まり、新たな執行部がスタートしました。現在、麻生さんは総理になっておられますので、佐室副会長が会長代行に就任して業務を遂行しております。

前進あるのみ

私がこの仕事を引き受けさせていただいた際、会長を始め理事の皆さんや評議員の皆さんにお話した重要なことがあります。それは“後を振り向かない”ということです。これからスタートを切る日本のバスケットボールについて、大事なことは前を見つめ、一步一步前進し、日本

のバスケットボールを再構築するのみだと。

理事や評議員の皆さんにもさまざまな思いが込められていて、過日の世界選手権大会の結果を検証して欲しいといったご意見や、この空白と混迷の過去を各人各様に深く考えておられる方が多いということも理解いたしました。例えそうであっても後を振り向くことはしないで、新しいバスケットボールを構築していくんだという決意を申し上げました。

期の途中でもある8月に就任いたしましたので、当面の任期である来年3月までの残された短い期間、とにかく前向きに業務を遂行したいと考え、執行部の体制もその方向でまとめていきたいと考えております。

今回麻生会長がこの職務を引き受けられたときに、以下の三つの所信を述べられました。

- 1) 日本協会運営の正常化
- 2) 財政の健全化とその確立
- 3) 競技力の向上と普及の推進

以上の3点は麻生会長が理事を含めて評議員に発信しました大きな方針です。

私はこれを申し受けて各地のブロック会議に出席したり、国体に出向いたりしたときに皆さんにお話しをさせてもらっています。

オリンピック出場に向けて

いろいろな会合で皆さんから出される多くのご意見は、日本のバスケットボールがオリンピックに出場できるようになるべきだといった、『チームJAPAN』の強化についてという内容でした。

今年の北京オリンピックのボール競技で、出場できなかった2競技のうちのひとつがバスケットボールでした。バレーは男女とも10年ぶりの出場でしたし、女子のソフトボールやフェンシング、プロ選手の構成とはいえ野球など、子どもたちの夢はチームJAPANがオリンピックで活躍することだろうと思います。オリンピックのステージから日本のバスケットボールを発信して欲しいというのが子どもたちや愛好家の一番の希望だと思いますし、事実そういう声をどこでも聞かされました。

私たちは2012年のロンドン、まだ未定ですが2016年のオリンピックに、何としてでも日本の男女バスケットボールチームを登場させ、日本のバスケットボール界がそのことに集中しようと呼びかけております。

本日開催された強化部会でもこのことを申し上げ、チームJAPANが男女ともオリンピックに出場するために、あらゆる努力をしなければならないことを話し合いました。極端な表現ですが、オールジャパン、インカレ、リーグ戦などすべての大会をオリンピックの舞台へ照準を当てて競技力向上を進めていきたいと。

最近、アジアでのハードルは相当高くなっていて、中国を始め中東諸国など、かなり強い国が多くなっていますが、努力すれば必ず実現できると信じております。私の友人や知人には、大きな選手が多いこれらの国に対して、男子は難しいのではないかという人がいますが、私はそれに対してある例を引き合いに出して話をしています。

戦後日本が2回目に出場した1960年のローマオリンピック、そのときはその前のメルボルンオリンピックに出場した糸山、鎌田、斉藤、東海林、今泉、奈良、金川選手などが中心で

した。結果的には苦戦して全敗でしたが、特に4試合目に対戦したホスト国イタリアには完敗でした。私はコーチの前田さんの配慮で5～6分試合に出させていただきましたが、当時イタリアはオリンピックのホスト国として、ヨーロッパでも1～2を争う強豪国でした。

そのころは4年後の東京オリンピックが決まっていたので、日本はこのような強いホスト国になれるのだろうかと感じたものです。

4年後に東京オリンピックを迎えましたが、チームの平均身長ではローマ大会が179cmだったのに対し東京大会では183cmと当時としては飛躍的に大型化が図られました。それでも身長でいえば参加国の中では最低です。

日本チームはオリンピック東京大会で奇しくも再び予選リーグでイタリアと対戦して、結果的に72-68でイタリアに勝ったのです。私は最後5分くらいを残してファウルアウトしてしまったので、ゲームの最後をしっかりと見る事ができました。あのローマオリンピックで歯が立たなかったイタリアチームを東京で破ったという感激はいまだに忘れ



られません。イタリアは東京大会で結果的に5位でしたが、ヨーロッパの強豪国を破ったということは大変印象深く心に残っております。

単純に比較はできませんが、この事例にもあるように、努力を積み重ねていけばそこには必ず道が開けるのではないかと思いますし、目標を持って努力すればきっと報われると確信しています。

私たち協会関係者は目標にしっかり向き合わなければなりません。リーダーが下を向けば子どもたちも下を向いてしまうでしょうし、信念を持ってあたれば中国であっても乗りこえられると信じています。オリンピックへの道を切り開くためにも、歴史の体験をこれからの人に伝えていきたいと思います。

私が大学4年生のとき、教育者として名高い小泉信三元塾長が体育会のメンバーを相手に講演した際、「練習は不可能を可能にすることができる」という言葉を繰り返し話されました。練習することによってこそ不可能を可能にするのがスポーツだと思いますし、私は東京オリンピックでそれを体験させていただきました。

特に男子はアジアにおいて強い国が多いので、高いハードルが待ち受けておりますが、一生懸命に丸となって取り組めば不可能はないと信じております。

今後、やらなければならないことも山積しておりますが、日本協会最大の目標は、男女ともオリンピックに出場するんだという気持ちを皆で共有することだと思います。

日本バスケットの強化

今回、私が日本協会の仕事に入って感じることは、関係者がバスケットボールを語らないで、ややもすると人を語ってしまう傾向があるということです。人のキャリアなどについて語るのではなくて、是非ともバスケットボールをしっかりと語って欲しいのです。

人を選ぶにあたって背後の人脈などよりも日本のバスケットボールを強くするのだという

視点に立つことが全てです。

強化については、まず指導者の問題があると思います。先日、新聞記者との懇談の中で申し上げたことは、ナショナルチームの指導者は専任制が望ましいということです。チーム JAPAN のコーチは、国籍の内外を問わず男女とも専任制をまず第一に考えていきたいと思います。次に子どもたちの育成の問題があります。テレビでご覧になってご存知の方も多いと思いますが、北京オリンピックではスペイン代表チームで17歳の選手が活躍しておりました。今までの日本ではこういうケースはなかったと記憶しております。優秀な選手がいなかったからか、系統的にそうなっているのかと言えば後者の方ではないでしょうか。もっと若い人をダイナミックに採用して引き上げていく形があってもいいのではないかと思います。

日本では、中学、高校、大学、社会人という順序や制度があり、それを大事にし過ぎているきらいがあります。突出することを避ける傾向がありますが、若い選手を大抜擢するようなシステムがあっても良いのではないのでしょうか。

次に強化対策としてチームのゲーム数の問題があります。もっとゲーム数を増やしていかなければなりません。JBLやWJBLはシーズン制を敷いて、ある期間にゲームが集中するシステムになっていますが、シーズン中であってもチーム JAPAN の国際ゲームができるようにしないと強くたくましくはなりません。現実には他のスポーツではそれを実行しているのですから。



それから中学、高校といったカテゴリーのことがあります。世界ではカテゴリーがどんどん変化しています。先日アジアでU-18の選手権があり、日本チームは決勝で中国を破り初優勝しました。この結果によって出場する来年の世界選手権はU-19の大会になります。また来年度にはアジアでU-16の大会も予定されており、カテゴリーの変更にとまなう柔軟なシステムにも手をつけなければなりません。

例えば国体において少年の部、成年の部などがあって少年の部は高校生ですが、そこに中学生が入ってもいいのではないのでしょうか。サッカーなどではすでに中学生も入っています。

b j リーグとの関係改善

私が新聞記者の方々からよく受ける質問にもう一つあります。それはb j リーグとJBLとの関係はどうするのかという質問です。静岡県浜松市をホームタウンにしたb j リーグのチームに浜松東三河フェニックス（昨年まではJBL）というチームがあります。先日浜松で開催されたゲームを観戦に行きましたが、地元では大変な人気でした。

静岡県には女子のシャンソン化粧品というチームがあり、人気チームではありますがテレビではなかなか放映してくれません。ところが今回はb j リーグのゲームをNHK静岡放送局が生で中継放送してくれました。チームに企業名がなく、地域密着形のプロチーム誕生ということで、地域と共に活動していくところにNHKが目をつけたのだと思います。浜松市は政令指定都市でスポーツが盛んなところですが、プロのチームはバスケットボールチームだけという

ことから、地元でも人気があるのだと思います。

日本のバスケットボールにおいて、プロ化は当然進めていかなければならないことだと思いますし、企業名を出さないで地域とともに生きるプロチームを育成していかなければならないと感じております。

したがってb jリーグとの関係について、時期的なことは明言できませんがb jリーグとJBLが同じステージでバスケットボールができる仕組みが考えられないか、これから検討を進めます。このことはb jリーグにも伝えましたし、早速次の理事会でプロ化を検討する委員会組織の発足について論議いたします。来年度からb jリーグは更にチーム数が増えると聞いておりますし、4年間の実績もありそれなりの市民権も得ていることから、同じステージでのバスケットボールは、そう簡単なことではないと思いますが、なるべく早い時期に何とか実現していきたいと考えます。

バスケットボールの今後の普及

次に普及の問題があります。現在日本協会に登録しているバスケットボール人口は約65万人で、その殆どが小学生、中学生、高校生です。かつては100万人ほどいたのですが、少子化や個人登録料の徴収によって減ってきています。オリンピックに出場するための強化にも裾野を広げなければなりませんし、困難は伴いますが登録人口を増やす努力をしなければなりません。

先般もインドネシアでジュニアの「3ON3」アジア大会が開催されました。ビーチバスケットボールという名称で、ビーチに板を敷いて3ON3バスケットをやる大会で、FIBAアジアでも取り組みを始めております。日本からは高校生を派遣し、男子は今一でしたが女子は優勝しました。国内においても日本のバスケットボール普及につなげられないか、3ON3の組織と話し合いたいと思います。

このようにして日本のバスケットボールを、何とかメジャースポーツに変身させたいと思っております。週末ともなれば多くの方が自然にバスケットボールを楽しむようになることが、メジャーへの第一歩といえるのではないのでしょうか。これから日本協会はメジャー化という大きな目標をかかげて進んでまいります。

ナショナルトレーニングセンターを視察しましたが、昔と違って素晴らしい体育館と合宿所が整備されています。施設面では十分環境が整っており、あとは人が心を入れて強化に取り組めばアジアで頂点に立つことは可能と確信しております。

おわりに

困難な時期を過ごした日本協会の活動ですので、すぐにはできないこともあろうかと存じますが、「メジャー化を目指し」「アジアの頂点を目指し」頑張りたいと思います。

今まで振興会と日本協会がどのような関係であったのかわかりませんが、諸先輩も多くおられ、大切なパートナーとしてバックアップをお願いしたいですし、試合などにもおいでいただき、ご意見なども是非言っていただきたいと思います。

いろいろなことを申し上げましたが、今後のご協力をお願いしてお話を終わらせていただきます。

交流会も盛会裡に終わる



愛知会長挨拶

本日はお忙しいところ多数の方にご参会いただき有難うございます。振興会もNPO法人化してから2年目を迎え、順調に活動を続けております。活動拠点である事務所につきましても、神田神保町にすっかり落ち着いております。本日は日本協会専務理事である木内さんからいろいろとお話を伺いましたが、私は振興会会長に就任当初から日本のバスケットボールをメジャースポーツにしたいと常々言っていました。本日は日本協会の役員の方々も多数ご参会いただいておりますが、私も日本協会の副会長を仰せつかっていることもあり、これからの協会運営につきましても、全面的に協力していきたいと思っております。



佐室日本協会会長代行ご挨拶

会長の麻生さんが総理になられた関係で、私に会長代行をやれと命を受け本日参席させていただきました。先ほど講演した木内氏は大学時代の後輩ですので何分よろしくお願いたします。新たに生まれ変わった日本協会は、大きく言って二つのことについて目標を持ってまい進いたします。一つは男女ともオリンピックに出場すること、もう一つは日本のバスケットの普及と発展であります。過去いろいろありましたが、それらにはとらわれないで前向きに取り組んでいきたいと思っておりますので、ご支援くださいますようお願いいたします。

この後、中村日本実連副会長にご挨拶をいただき、稲垣振興会副会長の乾杯の音頭と共に開宴し、会場は随所に懇親の輪が広がった。

なお、木内氏講演の中で触れられたbjリーグからも、中野社長と河内コミッショナー両氏が参加され、明るい雰囲気の中楽しいバスケットボール談義を交わしたことは言うまでもない。

講演会に引き続いて開催されたこの交流会には55名の方々が参加し、楽しい時間を過ごすと共に、昔懐かしい出逢いもあって和やかな雰囲気に包まれ、盛会裡に終了した。



スペシャルオリンピックス

第1回バスケットボール交流会を支援

上谷 富彦

振興会では社会貢献活動の一環として、昨年、知的発達障害のある人たちのスポーツ団体スペシャルオリンピックス日本・東京（以下SON・Tとする）に金銭的助成を行ったことは、皆様ご承知のとおりです。

小澤新理事長は、就任の挨拶で単なる金銭的助成だけでなく、知的発達障害のある人たちの大会への手助けなど、具体的な行動でも、協力していく考えを示しました。

このたび11月16日、第1回SON・Tバスケットボール交流会が代々木オリンピック青少年スポーツセンターで開催され、日比野副会長・小澤理事長・佐藤編集部長、審判として数名の会員がこの大会に参加・協力しました。

SON・Tでは、現在都内6会場で200名のアスリート（知的発達障害のある競技者）が週末にバスケットボールを楽しんでいます。

今回の交流会には、100名のアスリートとその家族、振興会をはじめとする多数のボランティアが参加し、初めての試みを実現したわけですが、バスケットボールの試合ができるアスリートはそれぞれの会場ごとにチームを編成し対戦しました。

当日は振興会から支援のために派遣した審判が出来る会員3名と委嘱した公認審判1名が、レフリースタッフを着て大活躍。審判のジャッジと大勢の観衆の見守るなか、決して上手ではありませんが、彼らは精一杯のパフォーマンスを演じました。

コートでは、生まれて初めて試合に出場し見事にシュートを入れて、両手を突き上げて満身で喜びを表わすアスリート、わが子の成長に思わず涙をながす家族など、感動的なシーンを見ることができました。



彼らの中には、まだ試合ができないアスリートもいます。試合ができないアスリートはパス・ドリブル・シュートの3種目による個人技能コンテストを行い日ごろの成果を発表しました。

参加した振興会の方々に感想を求めたところ、口々に、アスリートが皆、一生懸命プレイしているとの印象を述べていました。

スペシャルオリンピックス日本では、大会宣言で次のような言葉を述べています。

『私に勝たせてください。たとえ勝てなくても、戦う勇気を与えてください』と。アスリートたちはこの理念に基づいて全力を尽しているのです。

彼らは決して障害のある可哀そうな人ではなく、バスケットボールをひたむきに楽しむ同じ

仲間であることを、振興会の皆様に理解していただけたことは、とても意義のあることだと思います。

スペシャルオリンピックス日本では、全国色々な場所で日常的にバスケットのプログラムを行っています。これからも沢山の会員の方々に関心を持っていただければ幸いです。

SON・T ホームページのアドレスは次の通りです

<http://www.son-tokyo.or.jp>

〔振興会会員、SON・T会員〕



一枚の写真から・・・昭和7年のできごと

[歴史部]

明治大学バスケットボール部史の巻頭に、バスケットボールの創案者ジェームス・A・ネイスミス博士の写真が掲載されている。

昭和7年、明治大学バスケットボール部が米国に遠征したときに、博士と一緒に撮影した貴重な一枚の写真が発見された。

では、どのような経過でこの写真が残されたのか。

まず、『関六・35会』なるささやかな会合がその始まりである。

プラザ39号で角能良宣氏が詳しく紹介しているが、昨年亡くなった『横山房雄君』の呼びかけで、昭和35年に関東6大学バスケットボール部を卒業した仲間が、平成16年から各校持ち回りの幹事で旧交を温めていた。

第4回目の幹事校は日大で、卒業生全員が出席、愛知県在住の増田貞博氏が遠路遥々はせ参じてくれた。

このとき、増田氏から戦後まもなく他界した父親が、明治大学バスケットボール部に在籍し、戦前に渡米したときの記録写真を残しているとの情報を得て、早速この貴重なフィルムを届けてもらったのである。

現像してみると、明治のユニフォームを身にまとった青年達が、ネイスミス博士を囲んでいるではないか。(No1)

ほかにもシアトルのワシントン大学の校舎、体育館の風景を写したものがあつた。(No2・3) 当時、増田さんたち明治大学の選手たちは、本場アメリカのバスケットボールに思いを馳せて、勇躍、遠征をされたのであろう。

明治大学OBの農匡一郎氏に写真を見せたところ、その経緯を次ぎのように語ってくれた。

「昭和7年(1932)当時の部員のなかに二世のメンバーがおり、その伝を頼ってアメリカ本場の技術を習得しようと、遠征を計画し実行した。(No4) 当時は世界的大恐慌の最中であり、資金の調達は思うにまかせず、現地で転戦した一行は帰国の旅費に欠乏し、遠征先の大使館に借財をしてようやく帰国することができた。この遠征については当時学校から処分を受けたため、対戦成績などは正式の部史には残されていない。しかし、昭和59年農匡一郎氏が監督として米国遠征した折、ワシントン大学を訪れ、学校当局から50年ぶりの再会を歓迎されたことは、強く印象に残っている」と話された。

また、明治大学ではゾーンデフェンスを初めて導入したのも、この遠征の成果であったとも語られた。

振興会会員の中には、駿河台にあった旧明治大学の体育館でプレイされた方も沢山いると思うが、この体育館は昭和9年に完成したものだそうだ。

そして、不思議な糸に手繰り寄せられて、バスケットボールを愛する皆さんに紹介することが出来たことは幸運である。



No1 前列中央がネイスミス



NO2 当時のワシントン大学

歴史部会では、このようにバスケットに係わる資料の収集を行って、後世に伝えていきたいと考えておりますので、皆様のご協力をお願いします。

[文責 上谷]

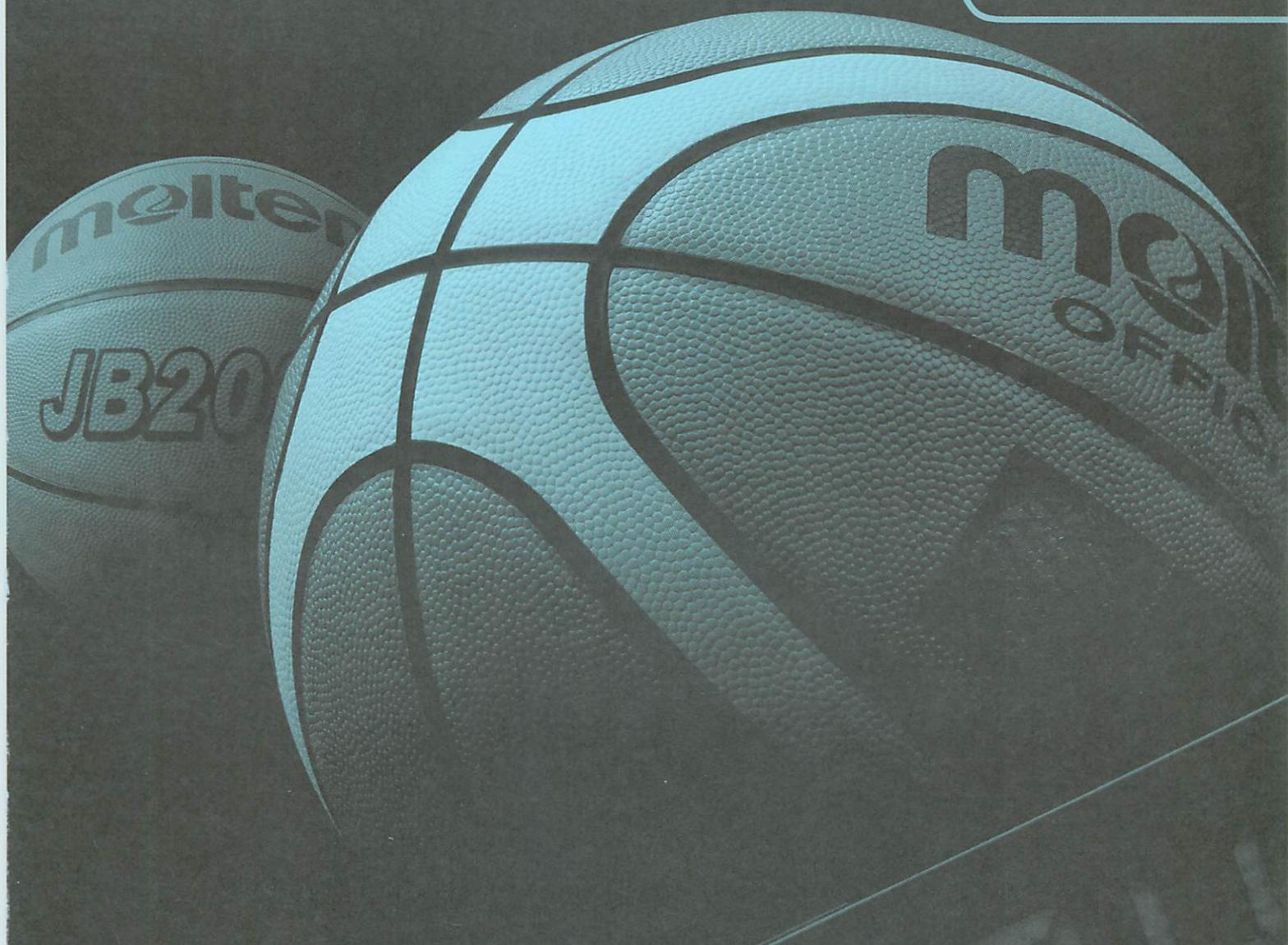


No3 当時のワシントン大学体育館



No4 アメリカ遠征した当時の面々

molten[®]
For the real game



For the real game

「プレーヤーの技術や意志が100%発揮される時、スポーツは本物になる」

私たちモルテン・ブランドは、この信念をもとに

世界に類のないボールと

スポーツエキップメント・メーカーとして

つねに完璧な製品づくりを目指しています。

本大会唯一の公式試合球

BGL7
GL7 国際公認球 検定球
貼り・天然皮革、7号球



www.molten.co.jp

株式会社 **モルテン** 東京本社 〒130-0003 東京都墨田区横川5丁目5-7

REUSE を考える

[環境の総合情報商社]

“地球にやさしく” どこかで見たような聞いたような言葉。

あなたはリサイクルに関心を持っていますか？

“地球環境をこれ以上汚したくない”これが私たちの願いであるとともに、人類に課せられた大きな課題です。

当社は携帯電話やパソコンなど、鉄を除いた金属（レアメタル）の回収、再生（リサイクル）を主な業務にしている会社です。

日本のバスケットボールの振興、発展を応援します。

リユース・ビズテック 株式会社

〒333-0842

埼玉県川口市前川2-33-1

TEL 048-263-7023

FAX 048-269-8009

代表取締役 永野 鉄洋